

## 噺家番付類に見る近世の桂文治代々 (要旨)

中 川 桂\*

本共同研究の検討材料である『懐溜諸屑』(以下、『諸屑』と略記)は落語家の収集した資料群であり、その中には噺家や寄席芸芸にかかわる多くの摺物が見られる。今回はそのうち、検討の一例として桂文治の代々にまつわるものを取り上げて考察を試みた。

そもそも桂文治は近世上方落語界を基とする名跡で、初代と二代目は上方にのみ存在した。三代・四代は上方と江戸の双方に存在し、五代目からは原則、江戸落語の名跡となり、現在も東京の落語界で十一代目文治が活躍中である。このように双方の落語界にかかわる大きな名跡であり、各種番付類にもきまって掲載されていることから、まず桂文治を確認することとした。

文治代々の概要把握には『本朝話者系図』を用いた。江戸落語界の三代目は、前名・扇勇が文政十年頃から天保末まで文治を名乗り、最後は大和・大掾を名乗る。また、江戸の四代目は前名・才賀から四代目文治となり、大和(大和・大掾)の名で没した。文治を名乗ったのは天保十二年から万延元年ごろである。『諸屑』所収の諸資料は多くがこの文治の時代にあたり、従って『諸屑』に収められた番付や寄席ピラの文治はほぼこの四代目と考えられる。

発表においては、まず初代および二代目の桂文治に関係する見立番付類を、主に大阪の図書館等に所蔵されているものにより紹介した。そのうえで、文治の名が見える『諸屑』所収の資料を整理

して紹介した。簡潔に記せば、四代目は故・才治郎門人で、才賀から四代目文治となるが、『諸屑』に所収される番付類の文治は、前述の通りほぼこの四代目文治と確定できる。ただし天保八年の摺物『雅俗流行合』の一点のみは時期が異なるため、ここに載る文治のみ三代目と考えられる。

特徴のある資料として、主任である文治の挿絵が載る色摺りの興行ピラが一点存在する。「当ル十一月廿七日夜より五日ノ間」とあって興行期間は知られるが、年次は記されていない。しかし『諸屑』所収資料群の時期から考えて、これも四代目文治の可能性が高いことを指摘した。

次に、『諸屑』の収集者である入舟扇蔵の代々をも確認した。扇蔵については厳密な代数確定が困難な面はあるものの、『本朝話者系図』ではひとまず三代(三人)の扇蔵が確認できる。初代・二代は時期的に『諸屑』とは関係が薄い。それに続く三代目であるが、『落語家奇奴部類』に「三代目扇蔵」と代数表記が見られるので「いわゆる三代目扇蔵」とは称してよさそうである。

文治ほどの大きな名跡ではないため、『諸屑』所収の番付類も、扇蔵の名が載らないものが多い。こちらも簡潔に記すと、時期的に考えて『諸屑』コレクションを残した扇蔵は、前名・入舟扇子から三代目扇蔵になった人物とみてよい。総じて見立番付からは、扇蔵(扇子)が落語界で大きな存在ではなかったことがうかがえるが、収集者である扇蔵の代数をひとまず確定できたのは意味のあるところと考える。

\* 二松學舎大学准教授